

【随筆】

リサーチ・スキルの「標準化」と「言語化」

— 英国博士課程留学記 —

春日 潤一

1. はじめに

この4月にLEC会計大学院に奉職する半年前まで、私はイギリス・ウェールズ地方の中心都市であるカーディフという街の英国立カーディフ大学欧州研究科^{注1)}の博士(PhD)課程に在籍し研究生活を送っていた。3年9ヶ月余りの研究生活の末、約7万語の博士論文を提出し、2時間近くに及んだ口頭試問(Viva)を終えて、昨秋、日本へ帰国してきた。論文のテーマは、「R・G・コリングウッドの前期実在論批判」。政治・歴史哲学の文脈で20世紀イギリスの哲学者R・G・コリングウッドの思想に関心をもつ私は、いまだによく知られていない彼の政治・倫理思想の哲学的基盤を、彼の哲学的実在論批判の分析を通して体系的に解明しようと試みた。したがって、私の専攻分野は本大学院の教育領域とは直接的には大きく異なっていたと言わざるを得ない。

そのような門外漢がなぜLEC会計大学院へ奉職することになったのか。それは何よりもLECの先生方の寛大な評価と御期待に負っているのは勿論であるが、私の主たる動機として、自らが英国留学を通じて漠然と抱いてきた基礎的リサーチ・スキル教育についての問題意識が、LEC会計大学院の

目指す方向性と強く共鳴したことが挙げられる。その問題意識とは、学問研究を行ううえでの土台となるべき基礎的リサーチ・スキルを広範な分野に応用可能な形にして、それをわかりやすく学生に伝授し、習熟させることの重要性である。カーディフで私が体験した博士課程院生のためのリサーチ・スキル教育は、それまで私が経験したことのないものであり、このような問題意識を抱く契機となった。

一方、LEC会計大学院では、マイルストーン管理方式という特色ある指導体制の下、研究時間の限られた社会人院生がいかにか最短距離で一定水準以上の修士論文を書き上げられるか、ということを中心に目標としている。その課題を達成するために、本大学院では、修士論文を書くために必要なリサーチ・スキルを、即座に実践可能な形で教えることに力を注いでいる。^{注2)}こうしたなかで、リサーチ方法論に関する同様な問題意識と経験をもつ一人として、何らかの貢献ができるのではないかと、この思いを持つに至った。

そこで本稿では、リサーチ・スキル教育に関する私の問題意識の背景となった留学中の体験を、英国博士課程留学記という形で報告することを目的としたい。言うまでも

なく、私は教育方法論やイギリスの大学院教育制度の専門家ではないので、本稿はあくまでも自らの経験に引きつけた「体験記」の域を出ないことをあらかじめお断りしておく。

2. 博士課程における研究支援体制

2007年1月にカーディフ大学に入学し博士課程での研究を始めるにあたって、所属学部から渡された大学院生用の研究・トレーニングハンドブック（以下「ハンドブック」）^{注3)}には、当学部の教育方針・課程のプログラム・履修すべきスキル・トレーニング項目のガイドラインなどが詳細に説明されていた。これによると、カーディフ大学では、イギリスの公的研究助成機関の助成を受ける学生が博士課程修了時に達成すべき能力の基準 Joint Skills Statement (JSS)^{注4)}を踏まえて、博士課程の学生のために大きく分けて①所属学部 ②自らの専攻領域が属する科学部門 ③全学の3層からなる重層的な研究支援・トレーニングの機会を提供している。

(1) 所属学部によるサポート

私の所属していた欧州研究科の場合、学部による研究サポートの構成要素は大きく2つに分けられる。第一の要素は、博士課程院生には研究領域に応じて指導教官(正・副の二人)がつき、研究・論文指導を行うことである。これは当然のことながら博士課程院生としての研究生活において最大・最重要の位置を占めた。とりわけ、私の正指導教官であったデイヴィット・バウチャ

ー (David Boucher) 教授とは、数え切れない数の一対一でのミーティングを重ねながら、議論し指導を受けつつ、論文作成に取り組んだ。これは前述の「ハンドブック」のガイドラインとも一致することだが、入学して最初の第一回ミーティングの際に彼から言い渡された指導方針は、ミーティングはあくまで学生の書いたものに基づいて行うということであった。学生の考えをまとまった形で文章化せずに徒手空拳であれこれ議論してもなかなか実質的な研究の進展につながらないという見地から、とにかく徹頭徹尾書くことをベースとして、それに基づいて議論しては論文草稿をアップデートするというプロセスを繰り返すということだった。そして、最初のミーティングの場で、渡英前に私が提出しておいた博士論文の仮目次案にそって最初の課題を指定され、次回までに何かしら書いて来るようにとの指示を受けた。初期は3週間ごとにミーティングが持たれたため、その3週間の間とにかく文献を読んでは少なくとも数ページの文章を書いてミーティングに臨むということの繰り返しであった。日本での研究の続きではなく、自分にとってほとんど未知の領域をテーマとしていた私にとっては、このことはなおさら大きな挑戦だった。私を書いたものを事前にメールで提出してからミーティングに臨むと、彼は必ず私の稚拙な英語の文章に文法的な点に至るまで詳細にわたって赤を入れて返してくれ、読むべき文献などのアドバイスをしてくれるのだった。私の研究が軌道に乗った中盤以降は、ミーティングの間隔は時に2~3ヶ月くらいにまでなっていたが、彼の指導のきめの細かさは最後まで変わらな

かった。また、彼が私の研究分野での第一人者であることによって、閲覧に特別の許可が要るコリングウッドの未公刊草稿や書簡、日記などをオックスフォード大の図書館などで閲覧する機会を得ることができたり、他の大学の研究者に助言をもらうための紹介をしてもらったりと、彼の論文指導で享受した恩恵は私の研究にとって決定的であり、計り知れないものがある。指導教官によって指導スタイルや熱意はさまざまであり一概によい面ばかり強調できないことは確かのようにだが、少なくとも私にとっては、こうした国際的水準のエキスパートによる充実した個別研究指導の機会は、イギリスの博士課程で学ぶ大きな利点のひとつであった。

第二の要素は、学部内で専門領域ごとの研究ユニット (Research Unit) を単位として関心領域の近い教員・院生との出会い・議論の場が提供されていることである。このユニットごとに半年に一度、博士課程院生による研究進展状況の報告会が教員も参加して行われ、正規の在籍期間^{註5)}にある院生が通常 20 分間の発表とそれに対する出席者との 10 分間の質疑を課される。私も、所属していた政治理論・政治思想史ユニットにおいて3年間で6回にわたって発表を行ったが、英語でのプレゼンテーションとディスカッションの経験を積むには最適の機会であり、留学期間の後半にて数多く取り組んだ外部の学会での研究発表のためのよい予行演習となった。

(2) Research and Graduate School によるサポート

院生のための研究サポートの第二層として、カーディフ大学では人文科学、社会科学、自然科学などの部門ごとに Research and Graduate School という枠組みを設け、その部門に共通のリサーチ・スキルやノウハウなどをワークショップという形で提供している。各学生は、指導教官の指示や自らの意思で受講するワークショップを選んで参加する。私の場合、自分の研究分野が属する人文科学系のワークショップに参加した。私の受講したワークショップのテーマの一例として、次のようなものが挙げられる。

- ・ 人文科学におけるアカデミック・ライティング
 - ・ 人文科学研究における意識 (awareness) とスキル
 - ・ アーカイヴへのアクセス
 - ・ 人文科学の研究方法
 - ・ 人文科学における出版 (研究論文・研究書)
 - ・ 出版企画書 (Book Proposal) の書き方
- これらのワークショップでは、主に人文科学系の教員が講師となって、自らの研究活動での経験を織り交ぜながら最新の研究スキル・ノウハウを教えている。講師たちは、研究資料を集積したアーカイヴへのアクセスの方法や研究論文を国際査読誌へ応募するための具体的な方法やノウハウ、マナーなど、実際に経験した者でなければ分からない情報を惜しみなく与えてくれた。特に、査読誌への論文応募の方法についてのワークショップでは、査読誌の審査委員の経験を有する教員が、審査委員の視点か

らどのような論文が採用されやすいか、応募の際に気をつけるべきことなどについて解説してくれた。また、「人文科学における出版」ワークショップでは、ケンブリッジ大学出版局で人文系学術書の編集者をしてきた講師が招かれ、学術出版の具体的プロセス・マーケット事情などについて出版社の立場から詳しく語ってくれた。こうした経験豊富な講師たちによる生きた情報を得る機会は、私にとって国際水準の研究活動の具体像をイメージしやすくしてくれる貴重な機会であった。

(3) 全学レベルのサポート

最後の第三層は、全学レベルのサポートである。ここでは、学問分野にかかわらず博士課程院生すべてに有益で必要な情報やスキルが提供されている。私の受講したワークショップの一例として、次のようなものが挙げられる。

- ・ 非英語ネイティブのためのアカデミック・ライティング
- ・ 剽窃の回避と著作権
- ・ 先行文献レビューの方法
- ・ 研究活動におけるネットワーキング
- ・ 学会・研究会の計画・準備の仕方
- ・ 研究のための IT スキル (Word の長文作成機能や文献情報管理ソフトなど)
- ・ 高等教育機関の研究・教育職への就職活動
- ・ 履歴書の書き方

これらのワークショップは、留学生のための英語支援部局の英語教師、基礎的アカデミック・スキルを専門とするスタッフ、就職支援部局のキャリア・コンサルタントなどの大学のスタッフや大学から委託された

外部講師によって担当されていた。こうした基礎的スキル・知識は、私の場合は日本で学部・修士課程と学ぶ過程で教員や院生仲間との個人的触発関係のなかで学んだものが多かったのは確かである。ただ、カーディフで受講した講座が私にとって新鮮だったのは、それらの知識・スキル・ノウハウが、配布される教材・スライドなどによって徹底的に言語化・可視化され、明示的・意識的に伝達されていたことである。このような講座は、私は日本では出会ったことがなかったものである。

以上のように、カーディフ大学では博士課程院生のために、各学部・各科学部門・全学という3つのレベルで、大学のもつリソースをフルに動員した研究支援体制をとっている。学部では指導教官と他の教員たち、そして同僚院生たちとの個人的な関係に基づいた研究指導が行われ、残りの2レベルではワークショップを中心とした組織的な研究支援がなされている。このワークショップ群は、Research Students Skills Development Programme (RSSDP)^{註6)}という名称の下、大学院センター (Graduate Centre) という部局によって一括して全学横断的に組織・運営されている。リサーチ・スキル教育についての私の問題意識を特に喚起したのは、このRSSDPにおける知識・スキル・ノウハウの伝達の在り方であった。次節では、このプログラムの内容についてもう少し掘り下げてみたい。

3. リサーチ方法論の「標準化」と「言語化・可視化」による共有

カーディフにおいて私が経験した研究支援ワークショップを貫くキーワードを私なりに表現すれば、リサーチ・スキルの広範な分野に応用可能な形への「標準化」と徹底した「言語化・可視化」にあったといえる。ここでは、リサーチ・スキルとしてはもともと基礎的な部類である「先行文献レビューの方法」についてのワークショップをサンプルとして、その一例を紹介したい。

(1) 標準化

「先行研究レビューの方法」は、私がカーディフでの研究を始めて間もない頃に受講した「非英語ネイティブのためのアカデミック・ライティング」というテーマの連続講座の数回分を構成していたと記憶する。全学部大学院生を対象とするこのワークショップには、科学部門に関係なくさまざまな学部の院生が参加していた。このような場でリサーチ・スキルとして先行文献レビューの方法を伝達するために、講師は学生が各自の研究の現場で応用できるよう、専門の枠を超えたジェネリックな形で伝えようとしていた。

「先行研究レビューの方法」は、「アカデミック・リーディング」(文献読解の方法)、「文献レビュー」(文献の内容を評価・記述する方法)、「リファレンス・剽窃の回避」(文献の内容に言及する際の注意点)などの要素に細分化され、それぞれの要素は特徴的な用語で説明されていた。例えば、研究のための文献読込みには、Scanning, Skimming, Searching という異なった読み

方を使い分けるべきこと、先行文献への言及には引用・パラフレーズ・要約という3つの方法があること、そして、先行研究に言及する際に気をつけるべき剽窃とは何かということ、いくつかのパターンに分けて説明していた。

先行文献を適切にまとめて自らの研究の土台とするこれらのスキルは、ほとんど例外なくどんな分野の学問研究にとっても必須の要素である。私自身も日本での学部・修士課程時代に、卒業論文や修士論文を書くために実際に文献を読み文章を書く過程で、「論文の書き方」本に目を通したり、自分なりに試行錯誤したりしながら実践的に体得してきたことであるが、私がこれらを「リサーチ・スキル」として改めてそれ自体として学んだ経験はなかった。

対照的に、留学準備段階から実際の博士課程留学に至るまで一貫していたことは、このような方法論を説明する用語(Scanning, Skimming, Searching など)が、広範に共有されどこでも通用するものだったことである。カーディフで使用されていた用語は、私が留学準備のために通った東京の英語学校や博士課程入学直前に参加したプレセッション・コース(Queen's University Belfast)でも共通であったし、イギリスで出会った他大学の院生との間でも通用するものであった。さらに、イギリスや北米を中心とした英語圏の大学がウェブ上で公開している基礎的リサーチ・スキルについての無数の教材を見ても、核となる事項は似たような用語で説明されている。この背景には、外国語としての英語教育研究が進んでいるという事情もあるのかもしれない。いずれにしても、英・北米

などの大学で一定の教育を受けた者であれば、このように高度に標準化された基礎的リサーチ・スキルあるいは知的スキルを共有している（あるいは少なくとも教えられている）と言ってもそれほど間違いではなさそうである。

(2) 言語化・可視化

では、このようなりサーチ・スキルは、どのように伝えられていたのだろうか。カーディフで私が受講した講座では、一回のワークショップの参加者を10名から15名程度に限定し、休憩を挟んだ3~4時間単位のセミナー形式を採っていた。

具体的な手順は、次の通りである。まずオリジナルの教材をもとに必要事項を説明する。この教材が秀逸で、通り一遍のレジューメのようなものではなく、説明しようとするスキルが、豊富な実例やTips（秘訣集）とともに、工夫を凝らして徹底的に「言語化」されたものであった。例えば、先行文献に言及する方法の一つとしてパラフレーズを説明するとき、模範例はもちろん、剽窃を疑われるような不適切なパラフレーズをパターン化し、それらを実例とともに示していた。教材に基づいた説明を一通り行った後、講師は例題を示してその場で学生にパラフレーズを自分でやらせる。その後、一人ひとりのパラフレーズを、最初に説明した模範的なパラフレーズの条件を満たしているか、不適切なパターンを回避できているかを時間の許す限り皆の前で分析してみせる。このような手順で学生の理解と実践的習得とを目指していたように思われる。

こうした教授法自体は、取り立てて目新しい手法ではないだろう。だが、私の眼に

印象深く映ったのは、学部での専門教育からすればやや副次的と看做されがちなりサーチ・スキルという領域に、専門のスタッフを配置しオリジナルの教材を開発してスキルを「標準化」・「言語化」し、短くない時間をかけて丁寧に「可視化」して伝授するという体制とその実践の蓄積だった。この体制やプログラムは、私の在籍中も毎年改訂が施され、不断の改善が図られていた。このような基礎的リサーチ・スキル教育に多大なりソースをかけるという姿勢は、英語圏の大学のリサーチ・スキル教育担当部門のウェブサイトの充実ぶりからも、カーディフに限らず多くの英語圏大学にみられる特長だと推察できる。

4. おわりに

カーディフでリサーチ・スキルについてのワークショップを受講している際、私は、留学準備のために通っていた東京の英語学校の英作文クラスで講師が口を酸っぱくして言っていたことをしばしば思い出した。曰く、「アカデミックな英語の文章には例外なく（今説明したような）原則・フォーマットがあり、どんな文章もこの原則を逸脱してはならない」と。とりわけ論文作成に直接かかわるような基礎的リサーチ・スキルの多くが、実はこの文章フォーマットを前提としていたものだったと改めて気づかされた。例えば文献読解の方法にしても、どこに何が書かれているかをこのフォーマットを前提として把握することになっているため、読もうとする文献がこのフォーマットに従っていなければ意味をなさない。

だからこそ、前出の英作文クラスの講師は、この原則に絶対に従うようにくどいくらいに強調していたのである。ゆえに、学術言語としての英語は、文章フォーマットからそれを書くためのリサーチ・スキルに至るまで、かなり明確で一貫した説明体系をもっているといつてよいだろう。それと比較すると、日本語の学術的文章がここまで標準化され、明示的に言語化された説明体系をもっているとは言い難い。

無論、ここで英語における方法論を全面的に導入せよ、とナイーブに主張したいわけではない。上述のようなそれぞれの言語を取り巻く状況の違いもあり、英語の方法論をそのまま取り入れれば済むという話ではないことは明らかである。^{注7)}ただ、英語を外国語として学び、その英語で学位論文を書こうと苦心した元学生のひとりとしての率直な感想は、学位論文の完成に不可欠なりサーチ・スキルが、このように明快でアクセシブルな形で積極的に提供されていたことは、博士論文完成までの道のりと労力を間違いなく短縮・軽減してくれたということである。こうした経験を、本大学

院での修士論文指導でも何らかの形で還元することができればと心に期しているところである。

最後に、敢えて飛躍を恐れずに言うならば、こうしたリサーチ・スキル教育を通して、学術的文章に限らず広い意味での知的な文章を理解し、批判的に分析して自分の文章にまとめるという技術とノウハウを、可能な限り誰にでも習得可能な形で共有していくという努力は、より公正で開かれた社会を形成していくためには不可欠な要素であるようにも思われた。

追記

以上のような問題意識と留学中の経験をもとにした前期の修士論文演習指導における取り組みとして、リサーチ・スキルに関する幾つかの資料を作成した。その一部を本稿末尾に付録として収録しておきたい。

(なお、資料中にて使用した参考文献等は、本稿の参考文献とは別に、資料において示した。)

(参考文献)

- Cardiff University, Postgraduate Research and Training in the School of European Studies: Academic Year 2010-11, School of European Studies, Cardiff University.
<<http://www.cardiff.ac.uk/euros/resources/Postgraduate%20Research-Training%20Handbook%202010-11.pdf>>
- Cardiff University, University Graduate College Programme,
<<http://www.cardiff.ac.uk/ugc/resources/University%20Graduate%20College%20Programme%202011-12.pdf>>
- 戸山田和久、『論文の教室—レポートから卒論まで』, 日本放送出版協会, 2002.
- 山本宣明, “修士論文作成のマイルストーン管理 (その1) —1年目の経過と課題—”, 『LEC 会計大学院紀要』, 第8号, 2011.

(注記)

注 1) Cardiff School of European Studies,
Cardiff University, United Kingdom.

注 2) 具体的な取り組みについては、FD 活動報告：山本宣明，“修士論文作成のマイルストーン管理（その 1）—1 年目の経過と課題—”，『LEC 会計大学院紀要』，第 8 号，2011 に詳しい。

注 3) Postgraduate Research and Training in the School of European Studies: Academic Year 2010-11, Cardiff University.

<<http://www.cardiff.ac.uk/euros/resources/Postgraduate%20Research-Training%20Handbook%202010-11.pdf>> なお、このハンドブックは毎年更新されており、私が入学時に実際に手に取った年度版は破棄済みのため、本稿では在籍最終年度版（2010-11 年版）を参照した。

注 4) この基準は、日本では日本学術振興会に該当する Arts and Humanities Research Council (AHRC: 当時は Arts and Humanities Research Board) と Economic and Social Research Council (ESRC) によって 2003 年に定められた。その詳細は下記のサイトで閲覧することができる。
<<http://www.vitae.ac.uk/CMS/files/upload/Researcher%20development%20statement.pdf>>

注 5) イギリスの博士課程では、フルタイムの正規の在籍期間が 3 年間とされており、この最低年限を過ぎると博士論文の提出が可能となる。通常の論文提出期限は 4 年とされているため、多くの学生は 3 年目終了後 4 年目の終わりまでに論文を提出することになる。この 4 年目の期間は Writing up period と呼ばれ、正規の在籍期間とは区別されている。なお、イギリスの大学教育制度の特色のひとつであるパートタイムの場合は、正規 5 年、提出期限 7 年以内とされており、多くの社会人学生が働きながら博士課程での研究に取り組んでいることも付記しておきたい。

注 6) 具体的なプログラムの内容は下記の URL にて公開されている University Graduate College Programme にて参照できる。

<<http://www.cardiff.ac.uk/ugc/resources/University%20Graduate%20College%20Programme%202011-12.pdf>>

注 7) 日本語での論文作成法についての解説本の中にも、英語におけるアカデミックな文章の書き方を参考に、それを日本語にも敷衍しようと試みているものはある。例えば、戸山田和久 (2002)。

(付録)「租税法演習指導」参考資料

文献を「読み込む」ということ

— 論文は「読む」ものではなく情報を「探す」もの —

修士論文を執筆する際に避けて通れない重要なステップのひとつは、自分の論文テーマに関する過去の研究を調査し、まとめることです。このプロセスでは、どうしても大量の文献を読み込まなければなりません。しかし、何十本もの論文を、小説でも読むように一行一行堪能しながら読んでいては、とても間に合いません。では、どうすればよいのでしょうか？

研究のための文献読解では、小説を読むような通常の「読む」という行為とは違う方法が必要です。とりわけ、文献を収集して初めて読み込む際に必要となるのは、端的に言えば、「読む」のではなく、必要な情報を「探す」方法です。この資料では、収集した何十本もの文献を前にして、その量に気が遠くなっている方のために、効率的な方法を提案します。

1. 読み始める前に

(1) 論文の基本的な骨組みを理解する

論文とは、著者が思ったことを漫然と徒然なるままに書き連ねた文章ではありません。著者が、明確な問題意識のもとに、その問題の著者なりの解決策を提示し、読者を説得するために書くものです。特に、学問の世界で「論文」というとき、著者は少

なくとも以下の要素を含めることが通常です。

- ① 研究の対象
- ② 研究の目的
- ③ 著者の問題意識
- ④ その問題意識の背景
- ⑤ 論文が問う問題（リサーチ・クエスチョン）
- ⑥ 問題についての著者の立場（論文の結論）
- ⑦ 著者の結論を支える根拠

著者は、これらの要素を読者に明確に理解してもらえるように論文を書くわけです。（少なくとも、いくら読んでもこれらがよく分からない論文は、よい論文とはいえません。）したがって読者である私たちとしては、これらの点を理解できればその論文を読む目的は達成できるわけです。

これらの点を理解できればよいわけですから、何もすべての論文を一から十まで読み通す必要はありません。これらの情報を、論文の頁を行き来しながらピックアップすればよいのです。

論文のスタイルは、著者や掲載媒体によって様々ですが、どのようなスタイルでも共通している基本フォーマットは、大まかにいうと序論・本論・結論の3つからなっています。

- ① 序論（「序論」・「はじめに」・「問題の所在」などの見出し）
- ② 本論（いくつかに分かれている場合が多い。）
- ③ 結論（「結論」・「おわりに」・「まとめ」などの見出し）

(2) 論文読解カードを作成する

以上のような論文を理解する目的のために、例-1 あるいは例-2 のようなカードを作成することをお勧めします。

※ 書式は自分がやりやすいように作ってください。例-1 のような多項目のものは自分のテーマにより近い論文を記録するには適していますが、重要度が比較的低いものであれば、とりあえずは例-2 のような簡易版で内容を大まかに記録しておいてもよいでしょう。

例-1

| |
|---------------------|
| 著者・タイトル |
| 論文の対象 |
| 論文の目的 |
| 著者の問題 |
| 著者の立場 |
| 著者の立場の根拠 |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| 自分の研究テーマとどのように関係するか |

例-2

| |
|----------------|
| 著者・タイトル |
| 著者の問題 |
| 著者の立場 |
| 著者の立場の根拠 |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| ----- |
| 自分の研究テーマと関連する点 |

論文1本につき1枚ずつ、論文から情報を探し出し、このカードを埋めていけばよいわけです。

2. Skimming, Scanning, and Searching (「多読」モード)

では、実際にどのように文献を読み込んでいくのか？ここでは、(1) Skimming (すくい読み)、(2) Scanning (走り読み)、(3) Searching (検索読み) という3段階^{注1)}で自分の論文テーマにとって重要なものをふるいにかけてながら戦略的に読み込んでいく方法を紹介します。

(1) Skimming

新しい論文を手にとったときにまずしなければならないことは何でしょうか？当然、その論文が何についての論文なのかを知らなければ話になりません。そこで、まずは次の点をチェックして、その論文が自分の関心に関係あるか否かを大雑把につかみま

す。

- ・ タイトル
- ・ 序論部
- ・ 要約…論文に要約・要旨が付されている場合は、それで大まかな内容をつかむことができる。
- ・ 各節・項の見出し
- ・ 結論部

以上の部分をできるだけ素早く、時間をかけずにチェックします。そして、自分の論文テーマに関するキーワードがあるかどうかを見極めます。この段階でキーワードが見つからない場合、あなたはこの論文をこれ以上読む必要はありません。さっさと閉じて、次の論文を手に取りましょう。

このようなプロセスは、実は「読む」という範疇に入らないと言えるかもしれません。そもそも、自分のテーマに関連するキーワードを含んでいなければ、論文検索にヒットすることも、プリントアウトすることもないでしょう。そういう意味で、すでに無意識にやっている方も多いと思います。これを Skimming といいます。

(2) Scanning

Skimmingによって、論文が自分のテーマに関連がありそうだと判断したら、初めて「読み」始めます。

ただし、繰り返しますが、ここでも冒頭から最後まで漫然と読んではいけません。まずは「その論文がどのような問題を扱っているか」、「その問題について著者はどのように考えているか」の二点が分かれば充分です。(上の例-2のカードで言えば、「**著者の問題**」と「**著者の立場**」に当たります。)

この二点は、序論部と結論部に書いてあ

るはずですが。なぜなら、論じようとする問題を序論に、その問題についての著者の見解を結論に書くことが論文の共通ルールだからです。読み手である私たちは、論文のルールに従って、必要な情報を定められた場所から見つければよいだけの話です。

この時点で、カード例-2であれば「**著者の問題**」と「**著者の立場**」を埋めることができるわけです。(例-1であれば、「対象」「目的」も埋められるはずですが。)

(3) Searching

さて、残るは著者の立場の根拠を探すことです。ここで初めて本論部分のページに目を通していくこととなります。しかしここでも、本論をだらだらと読んではいけません。

著者の立場を支える根拠は、基本的に結論部で要約した形で述べられていることが普通です。典型的には、

- ・ 「以下の3つの理由で、筆者は～と考える。第一に…。第二に…。そして最後に…。」
 - ・ 「ゆえに筆者は、○○、△△、××の理由から、～と考える。」
- という表現が考えられます。

こうした部分に注目すれば、形式的には、カードの「著者の立場の根拠」欄も埋めることができますが、より正確に根拠を理解するためにはやはり本論をみる必要があります。

ここで提案したい方法は、結論で簡潔に述べられている各根拠の特徴的なキーワード(法人税法の「第○条×項」とか基本通達「○-○-○」など)に注目することです。それぞれの根拠のキーワードを、本論

の頁を繰り返しながら (Scanしながら) 探します。そのワードが眼に留まったらその部分 (段落) を注意して読めば、根拠の詳しい説明が書いてある可能性が高いわけです。このようなことを、それぞれの根拠について行えば、著者が挙げている根拠の内容を大まかにつかむことができるはずです。

以上の3段階全体で、30分^{注2)}もあれば論文の内容のあらましを知ることが出来るはずです。もちろん、こういう読み方に慣れてない場合や、テーマについて基本的な知識がないうちは、もっと時間がかかるかもしれません。しかし、できるだけこのような戦略的方法を我慢して意識的に使い続け、何本も論文をこなしていくうちに、スムーズにできるようになります。

3. 「精読」モード

Skimming, Scanning, Searching によって、読み込むべき文献を数多くこなし、そのテーマを取り巻く問題と論者の見取り図 (いわばそのテーマの地図) をつかみます。

その過程で、テーマについて、自分が論じたい問題をズバリ論じているもの、傍論的に触れているもの、その問題を論じるうえでの基礎知識を提供するもの、または、自分がとりたいと考える立場に似た立場、あるいは反対の立場など、さまざまな論者が登場することでしょう。そして、各々の論者の立場は、いくつかのパターンに分類できるのかもしれませんが。このような場合に、論文1本について1枚のカードを作っておくと、そのカードを見ながら分類することができ、議論を整理していくう

えで便利です。

こうしたプロセスを経て論文テーマについての先行研究を整理していくことで、自分のテーマにとって欠かすことの出来ない重要な論文が現れてくるはずです。ここで、論文を丹念に精読する必要が出てくるわけです。

この段階では、Skimming, Scanning, Searching の速読意識を忘れて、注意深く丁寧にじっくりと**著者の論理を追っていく**ことが最重要になります。(つまり、「読み込み」段階と「精読」段階では**読み方のモードを変える**ことが大切です。) 上で説明したプロセスを経て、テーマについての全体像をつかみ、その論文がどのような位置にあるのかを理解した上で精読するのと、まったく頭が白紙の状態から一本一本むやみに精読して、複雑に入り組んだ情報を大量にインプットして脳内をカオス状態にするのとでは、どちらが効率的かは自明のことと思われま

す。研究論文を書くための先行研究の読み込みは、以上のように戦略的に効率よく進めていってください。

4. まとめ

論文とは、一定のルールを持った文章の形式のひとつです。著者は、やみくもに文を書き連ねているわけではなく、共通の決まりに従って書いています。読者である私たちも、そのルールに従って、欲しい情報を探し出せばよいのです。(裏を返せば、このことは、私たちが修士論文を書くときも、そのルールに沿って書くことを求められて

いるということです。その意味で、「読む」ことと「書く」ことは、相互に不可分に関係しています。)まだこのようなルールについて自信がない人は、市販の「論文の書き方」についての本を開いてみてください。どの本にも基本的な点では同じことが書かれているはずです。

文献に読まれないためには、「目的を持って」読まなければなりません。何のために読んでいるのか(「多読」モードなのか「精読」モードなのか)、どんな情報を知りたくて読んでいるのか(自分のテーマを明確に意識しながら読んでいるか)、知りえた情報はどのように使えそうなのか。常に脳をフル回転させて、能動的にアグレッシブに情報を取り出して整理し、自分の論文テーマについての先行研究マップに位置づけていくことです。

この資料で紹介した意味でのリーディングは、慣れないうちはとても疲れます。特に最初の10本くらいはうまくいかないかもしれません。しかし、我慢して続けて自分自身を訓練していくことで、一段も二段も上の情報処理能力を得ることが出来るでしょう。このような能力は、修士論文を書くための学術的なスキルに留まらず、将来の実務の場面でもきっと大きな力となってくれるはずです。

リーディングにまつわる6つの迷信

米・ダートマス・カレッジのHPで公開されている教材は、文章読解にまつわる6つの事柄を根拠のない「迷信」として指摘しています。

① 文章を読むときは、一語一語読まなければならない。

「もしもあなたが重要な語と重要でない語を同じくらいの努力を払って理解しようとすれば、あなたは読むスピードばかりか、理解力まで制限してしまうことになる。」(余りマイクロな視点だけではなく、俯瞰的に文章の構造をつかむ視点が大切です。)

② 文章は一回読めば充分である。

「もっとも効果的な勉強とは、(一回目の)リーディングは出来るだけ短い時間で終え、文献で説明されている考えや事実を反復・整理・関連づけをして、それらの応用可能性について考えることに多くの時間を充てることです。」(これらのことを考えるために、何度も一回読んだ文献に戻ることも必要です。)

③ 文章を飛ばし読みすることは恥ずべきことである。

④ 読むスピードを上げるためには速読マシンが必要である。

「ナンセンス!読むスピードを上げる最も効果的な方法は、意識的に速く読むように自分自身に強いることです。」

⑤ 飛ばし読みをしたり余りにも速く読みすぎたりすると、理解力が落ちる。

「ある研究は、スピードと理解力にはほとんど連関がないことを示しています。」

「(主要な論点と細部を適切に位置づけること、そしてそれらを素早く見出すという課題をあなた自身に課すことなどの)

あなたの読む目的に集中していれば、スピードと理解は両方とも上がります。」
「あなたが気にすべきは、どれだけ速く論文を“読み終える”かではなく、**どれだけ素早く自分が必要な事実と論点を見出して位置づけることが出来るか、**であるべきです。」

⑥ 速く読めないのは、眼（の使い方）に何か問題があるからである。

「通常、読むスピードを遅らせるのは、眼ではなく脳です。」（速読に特殊な眼の動か

し方があるのではなく、クリアな脳で能動的に理解しようとしているかどうか（重要。）

出典：Martha Maxwell, Six Reading Myths, Academic Skills Center, Dartmouth College

2001, <http://www.dartmouth.edu/~acskills/success/reading.html>

（参考文献）

- Martha Maxwell, Six Reading Myths, Academic Skills Center, Dartmouth College 2001, [〈http://www.dartmouth.edu/~acskills/success/reading.html〉](http://www.dartmouth.edu/~acskills/success/reading.html)
- Academic Reading Skills, University of Northumbria. [〈http://www.northumbria.ac.uk/static/5007/11spdf/skills/academicreading.pdf〉](http://www.northumbria.ac.uk/static/5007/11spdf/skills/academicreading.pdf)

（注記）

- 注 1) 文献読解についてのこの3つの方法は、文献によって定義が多少異なるが、ここでは表記の意味で用いることとします。
- 注 2) 時間はあくまでも目安ですが、できるだけ短い時間で出来るように努力してください。